

大失敗ソリュション

萩原真治

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ソリュシャン・イプシロンは活躍の機会に飢えていた。確かに、同僚が失敗する中、自分は仕事を忠実にこなせているという実感はあった。しかし彼女は実のところ望んでいた。誰しもが認める大成功を。デミウルゴスの輝かしい功績も上回るような、圧倒的実績を。そつなく仕事をこなすソリュシャンは意外と承認欲求が強かった。しかしそんな彼女だってミスをする。大成功を望んだ結果、足を掬われ、取り返しのつかない大失敗をしてしまう。そう、アインズをナザリツクから消してしまうという、取り返しのつかない失態を。

時系列は八巻辺りです。ルプスレギナがアインズに愚か者されるところから。アインズが存在が消えるわけではありません。著者はソリュシャン大好きです。アウラかわゆ。

― 追記― 本編ネタバレ

玉座はWIとのご指摘を受けました。作者のリサーチ不足です。申し訳ありません。

仕方ないので本作において、玉座は普通のアイテムということにしておいて下さい…泣 宜しくお願致します。

目次

忠誠心ソリユシヤン	1
愚考するソリユシヤン	3
うきうきソリユシヤン	8
感嘆するソリユシヤン	11
第5話	13

忠誠心ソリュシヤン

「この愚か者が！」

敬愛する主人の怒鳴り声にソリュシヤンはびくりと身体を震わせる。それがこの身に向けられたものではないと分かっているとしても、尋常でない恐怖が粘体の奥底から湧き上がってくる。いやただの恐怖ではない。それは自分という存在が根源から揺さぶられる外部からの波動だ。ふとソリュシヤンは自分の下着が湿っていることに気付いた。あまりの恐怖に失禁した、というのもあながち間違いではない。アインズへの畏怖の念から、タガが緩んで自身を構成する酸が漏れ出てしまったのだ。ソリュシヤンは美しい顔を歪め、自分を恥じる。この誉れ高きナザリックの最奥、至高なる玉座の間で粗相をするなど……。彼女は本気で自害しようかと悩み、自分の首にナイフをあてがう。魔力が付与されているとはいえ、ナザリック基準から言えば「普通のナイフ」だ。こんなものですつぱりと死ぬことはできない。しかしソリュシヤンはたとえ微々たるダメージで苦しみの中で死のうとも構わなかった。むしろ自分の苦しみと耐えがたい苦痛が、敬愛するアインズの供物になるのならば……、何も問題は無い。むしろご褒美でありんす。

「……なんてね」

一瞬の逡巡のあとそう呟き、ソリュシヤンはため息と共にその手をゆつくりと下げる。最初から分かっていたことだ。この身の全ては「アインズ・ウール・ゴウン」のもの。私は彼のギルドの誇り高き所有者であり、この身は三千世界の果てまであの御方に捧げている。ともあれば、この命も当然タグ付けされた所有物。勝手に死ぬことなんて許されない。そこでソリュシヤンはほう、と頬を上気させて倒錯的な笑みを浮かべる。もはや私は、私の運命のアルファからオメガまでアインズ様に縛られているのね。いえ、縛られているなんて不敬だわ。優しく縛り上げていただいているのよ。ソリュシヤンの染みはさらに大きく広がった。

ナザリック地下大墳墓第十階層「玉座」。

ソリュシャンは現在そこに立っている。まるで何百年も前からそこに在った家具のようにその身を完全に場に馴染ませている。当たり前だ。ここは聖域も聖域。ナザリツクに仕えるシモベなら誰しもこの聖域を知っている。この場所はシモベにとって、畏怖、恐怖、憧憬、誇り。サウダージのように複雑で強大な感情を抱かせる場所。彼らの場所に立ち入ることが許されるだけでこの身に過分に余る。階層守護者各位ならまだしもただの他のポップするようなシモベからしてみれば「ただ」な訳ないのだが、メイドが本来入れる場所ではないのだ。至高の41柱の神々しい残滓によつて構成されるこの空間に。

しかしそのまとめ役であるモモンガ改めアインズ・ウール・ゴウンによつてシモベの立ち入り解禁された。しかも御手によつて直接創造されたNPCならまだしも、名を持たぬただの下等なシモベ風情までもが許可された。これにはさすがにソリュシャンも眉をひそめざるを得なかった。多くのNPCが顔を歪めていただろう。もしかやこれは自分たちの忠誠心が試されているのではないか、ここでシモベたちを殺せという命令を暗にされているのではないかと思つたほどだ。そしてシモベたちも何らかの自分たちへの罰、あるいは死ぬことで忠誠心を披露せよ、と命令を受けているのだと思うものが大半だった。結局それは彼らの勘違いで、寛大で慈悲深い主人の判断に苦惱しつつも咽び泣いてそれを受け入れることになつたのだが。

そんな聖地にソリュシャンはひざまずき、ルプスレギナの様子をこつそりと伺う。

おそらく彼女には死が与えられるだろう。それはほぼ確実だ。あの温厚で偉大な主人をかつてないほど怒らせたのだから。現にルプスレギナも恐怖で自分の設定を忘れるほど取り乱している。もちろん姉妹として悲しく思う。可能ならば減刑してほしいと思う。しかしそれこそ愚か。主人の決定と、それを引き起こした神の怒りに口を挟めるわけがないのだから。

愚考するソリュシヤン

ソリュシヤンはルプスレギナに罰が与えられるその瞬間を、ただ伏して待つ。

しかし、首が転がる音の代わりに聞こえたのは、ミシイという何かがひび割れ砕ける音。まさか頭蓋掌握したのかしら、とソリュシヤンは目を閉じ辺りを見渡す。アサシンのクラスを保有する彼女にとつてはこの程度造作もないことだった。どうやら姉を叱つた怒りのせいか、主人の手に力が入り、玉座の手掛け部分が破損してしまつたようだ。それほどまでにお怒りなのだ。彼女は、これ以上神の怒りをこそこそ伺うような真似は不敬だと思い、それ以上見ることを止めた。何よりあと少しでもこの光景を見続けたら、恐怖のあまり気が狂つてしまうだろう。ソリュシヤンは再び主人の判断を待つ。家具になることに徹する。

結果としてルプスレギナは許された。主人の優しすぎるとも言える、寛大にして慈悲深きご判断によつて。

ソリュシヤンは改めて絶対なる忠誠を誓う反面、アインズから微かに放たれる失望の気配を鋭敏に感じ取つた。——それは自身の至らなさから来る自分への諦念だったのだが——、ソリュシヤンはそれを「敬愛する主人は私たちの無能さに呆れているのだ」と解釈した。「ゆけ。そして己の勤めを果たせ」

主人の重々しく、威厳に満ちた声でソリュシヤンは我に返つた。ルプスレギナがやる気に満ちた表情でその場を後にした。

ソリュシヤンは安堵した。もし主人の声がなければ彼女は「至高の御方に見捨てられる」という、ナザリツクに蔓延する公然のタブーについて考え続け、発狂に至つていたことだろう。

崇拜すべき主人の御声により正気に引き戻された彼女は、自分を思考の迷路から救い出して下さったことに深く感謝した。そして彼の支配者に見捨てられないよう、どんな些細なことでも役に立たねば、と奮起するのであつた。

「ふう」

とアインズはため息を吐く。ソリュシャンがほんの少しぴくつと身じろぎする。

(あ、ソリュシャンは妹だもんな。やっぱり目の前で姉が叱られるのは嫌だよな)

アインズは配慮が足りなかったな、と反省する。

(まあルプスレギナも悪いにせよ、俺の伝達不足が一番の原因だからな。支配者ロールはやっぱり難しいよ……)

NPCの意識改善、ほんとにやらなくちゃな、とこっそり心のメモに書き込む。

「ん？」

ふと自分の右手を見ると、手掛けを握りつぶしていることに気付いた。

(あつ、やつべ)

慌てないよう、カリスマ溢れる感じで自分の手を引っ込める。ソリュシャンはその様子を微笑みながら、しかしじっと見つめていた。

(どうしよう、物に当たるやつだつて思われたかも……)

アインズは焦り、それはすぐに沈静化された。その間もソリュシャンはこちらを微笑を湛えて伺っている。

(どうしちゃったのこの子。ソリュシャンはいまいち何を考えてるか読めないんだよな)

アインズは軽く咳払いをし、努めて冷静を装い、威厳がある(と思われる)態度でソリュシャンに尋ねる。

「んん……。ソリュシャンよ、どうかしたか？」

「恐れながらアインズ様」

(おう、なんか食い気味)

ソリュシャンはやや前傾姿勢になり、異性を魅了(捕食)する微笑で応える。

「偉大なる玉座が破損されているご様子。よろしければ修復させて頂ければと思います」

「ふむ……」

(まあ、ひび割れた玉座では格好がつかないか)

「そうだなソリュシャン。しかし修復は私がしよう」

面倒だし上位道具創造（クリエイト・グレーター・アイテム）でいいか、と手を挙げるアインズ。すると「あっ」と小さな声が玉座に響いた。

（んん？）

とアインズは首をかしげる。声を発したのは間違いなくソリュシャンだろう。しかしアインズには彼女がそんな声を上げるNPCだという認識がなかった。

「どうした、ソリュシャン・イプシロン」と優しくアインズが問うと、
「恐れながらアインズ様！」

先ほどよりさらに食い気味に応えられ、びくうつとするアインズ。

「……どうした」

（なんか俺さつきからこれしか言ってなくね）

「はい……、もしよろしければ、新しい玉座をご用意させて頂ければと愚考致します」

（愚考つてナーベラルかよ）

脳内でアインズは思わずそう突っ込んだが、そんなことはもちろんおくびにも出さない。

「ふむ、新しい玉座か」

はい、とポーカーフェイスのソリュシャンを尻目にアインズは考える。確かにありっちゃありだ。たまには玉座を変えるのも悪くない。（インテリアを変える事と気分転換にも繋がり、仕事のモチベーションも上がるって、大図書館（アッシュールバニパル）で借りた本にも書いてあったしな！）

しかし一つだけ疑問がある。

「ソリュシャンよ。新しい玉座の当てはあるのか？」

NPCが玉座のようなアイテムを保有しているとは記憶していない。まあデミウルゴスのように、自分で作ったという線も考えられるが。

「宝物殿から選ばせて頂ければと」

「宝物殿か」

これは意外だった。NPCの心理的に、宝物殿のアイテムを使わせ
てくれ、と言ってくるなど思ってもみなかったのだ。

「ふむ。しかし今はパンドラズ・アクターが出払っているな」

パンドラズ・アクターはモモンに扮してエ・ランテルに出張中だ。
やはり管理人不在でNPCを一人で宝物殿を歩かせるのは若干抵抗
がある。

「申し訳ございません。アインズ様。出すぎた真似を致しました。自
害致します」

「ふむ、よいよいソリュシヤン……つておい！」

アインズは慌てて、微笑みながら自分の首をはねようとするソリュ
シヤンを静止する。

(まったく……、油断するとすぐこれだよ)

「お前の忠誠は良く分かってている。しかし自分の命を粗末に扱うな。
それは私を不快にする行為と知れ」

「……！ 申し訳ございません……」

ソリュシヤンは珍しくそのポーカーフェイスを崩し悲しそうな顔
をして額を地面に擦り付けた。

(……なんか、ちょっとかわいいな)

これがギャップ萌えてやつか？、とアインズはかつてペロロン
チーノに力説されていた言葉を思い出す。

「構わないとも。コキュートスやセバスもそうだったが、自分の意見
を述べることは良いことだ。私はお前たちに無限の可能性を見出し
ているからな。その具申、嬉しく思うぞ」

するとソリュシヤンはがっつと顔を上げ、「ありがとうございます」と
微笑を湛えた。

(お、いつもの顔に戻った)

アインズはちよつと楽しんでた。ギャップ萌えの一端に触れた
気分になり、またかつての仲間との記憶も思い出し、少し機嫌がよく
なっていた。

「ソリュシヤン・イプシロン」

「はい」

ソリュシヤンは少し真剣な顔でアインズの言葉に応える。

「宝物殿へ入ることを許そう」

その時のソリュシヤンの顔は筆舌尽くしがたいものだった。常の微笑からだんだんと表情が崩れていき、一瞬泣きそうな顔になり、それからきつ、つと唇を結って「アインズ様の慈愛溢れるご判断に感謝いたします」と再び伏して感謝の意を表した。

「ふふ……、あとでいくつかアイテムを渡そう。シズに開錠してもらうがよい」

「はっ」

「良い玉座を見繕うのだ。期待しているぞ」

「……いーはいー！」

ソリュシヤンはアインズが見たこともない、歳相応の少女のような晴れやかな笑顔で返事をするのだった。

うきうきソリュシヤン

此処こそが紛う事無く宝物殿だ。ソリュシヤンは心の最奥からそう思った。宝物とはここに納められているものだけを指す。そう思わせられるほど、目の前の光景は信じ難いものだった。

収まり切らずに積まれた金貨の山、そのどれもがガルガンチュアを越すほどの高さだ。そして地平線の彼方まで伸びる漆喰の棚には、至高の数々が鎮座している。その一つが一つが強大な力を秘めていたり、並べてならぬ価値があるものばかりだ。ソリュシヤンはその静謐な雰囲気以身震いする。

「アインズ様が本当に信頼できる者（パンドラズ・アクター）に管理を任せられたのも納得ね……」

ナザリツクには重要な領域が幾つも存在するが、ここはその中でもトップクラスだと言えるだろう。この場所が、万が一にも乗っ取られたいらと思うとどれほどの被害を受けるのかと思うと、この粘液の体が凍りつく程にぞつとする。

「アインズ様のご好意で許可して頂いたのだから、気を引き締めないと」

そう、「本当に信頼出来る者」としてこの場所に居させて頂いているのだ。彼女はその事実にうつとりし、ぐにやつと顔を凶悪に歪め（同属から見ると顔をふにやふにやにさせて）ぷかぷか笑う。全てを擲つてこの役目を果たさねば、とソリュシヤンは奮起する。

「早くお選びしなくては」

ソリュシヤンは被っているガスマスクをしゅこーと鳴らす。これはシズから借りたもので、毒に対する耐性をMAXにまで高める代物だ。宝物殿に立ち込めているブラッド・オブ・ヨルムンガンドによる毒の瘴気は、皮膚からも侵食する現地人にしてみれば災害クラスのトランプである。しかしこのアイテムは何故か被るだけで全てカット出来てしまう優れものだ。

「被るだけで、全ての毒を退ける……流石は至高の方々の品ね」

このようにすばらしいアイテムを持つシズに僅かに嫉妬するが、そ

の不敬とも呼べる凡念を慌てて振り払う。「それにしてもどこから手を付けたものかしら」

ソリユシヤンは膨大なアイテムの数に困惑する。これだけの数の中から一つの品を探すことは現実的ではないし、時間の無駄だ。御方の何よりも貴重な時間を無為に消費するような真似は断じて許されるものではない。

「ええと、玉座の場所はと……」

ソリユシヤンはアインズから借り受けたアイテム、「宝物殿専用書梯」(フローティング・ラダー)を起動する。梯(はしご)と銘打っているが、一見少し大きめのサーフボードのような見た目をしている。実際は「フローティング・ラダー」に任意のアイテム名、もしくはそのイメージを伝えると、それがあある場所の近くまで連れて行ってくれるという優れたものだ。これはそうもパンドラス・アクターがフローティング・ボードの呪文を改良し、アインズに奉納したらしい。最初はただの板だと思っていたが、実際に使ってみるとその有益さが身にしみて分かる。多少あいまいなイメージでも、このアイテムはすぐに動き出し、有能な司書のように利用者を案内してくれる。乗り心地もよい。これを一介の守護者が作り出したというのだから驚きだ。

「やはりパンドラス・アクター様は優秀と判断せざるを得ないわね」
そうソリユシヤンは思い、少し顔を歪める。正直な所、彼女はパンドラス・アクターをあまり認めていない。姉であるユリと守護者統括であるアルベドを「お嬢様」呼ばわりしたのだ！ しかもよりにもよって御方の目の前である。なんとという屈辱的な仕打ちだろう。最初それを聞いたときは耳を疑い、即座にドロドロとした粘液状の殺意が湧き上がってきたものだ。両者とも至高の御方によってナザリックでも大変名誉ある役職に封ぜられている。それを御方の目の前で嘲笑したに等しい。いったいなんだというのか。自分だけの創造主がいることがそんなに偉いのか。

「(……いえ、それについて考えるのはやめましょう)」

このタブーについて考えるのをソリユシヤンは即座に放棄した。これについて考えすぎると、職務を全うできなくなるかも知れない。

そんな漠然とした恐怖がソリユシヤンにはあった。

「……まあ、決して増長しているとう訳ではなさそうね」

もし仕事をおろそかにして、宝物殿を乱雑に散らかしているようならアルベドにチクることも考えていたのだが、この宝の整理のされ方といい、保存の良さや、フローティング・ラダーといい、そんなことは無さそうだ。

ソリユシヤンは宝物殿の領域守護者の認識をちよつとだけ改めた。

感嘆するソリユシヤン

「それにしても本当に素晴らしい、強大なアイテム群ね」

ソリユシヤンは至高の御方が集められた、至高の品々に改めて感嘆する。フローディング・ラダーに乗ってそれなりの時間が経つというのに、柵に終わりは見えない。しかも一瞬で過ぎ去っていく景色の中にある、アイテム一つ一つが、ソリユシヤンたちよりも価値が高いと思われるものばかり。(アインズに言わせて見れば、仲間の創ったNPCこそが最も価値のある宝な訳だが)ソリユシヤンは、こんなにも素晴らしい場所に立ち入りを許され、そしてこの栄えあるナザリックに仕えることができる喜びを噛み締めていた。

ソリユシヤンが誇りを胸に抱いていると、フローディング・ラダーの速度が緩まり始める。書梯が椅子系統のアイテムに反応したためだ。辺りの柵はスペースが大きくなっており、大型のアイテムが収められるようになってきた。ソリユシヤンは一つの漏れもないように柵をじっくりと眺めていく。いくらゆっくりとはいえ、100を越える無数のアイテム群の一つ一つを精査していくのはおよそ人間業ではない。しかし、ソリユシヤンは人間ではない。アサシンという観察力に優れたジョブを修める優秀なメイドだ。さらにこれは敬愛なる主人のためであり、ナザリックに属するものならば能力的に無理でもやるだろう。要するにソリユシヤンには造作もないことだった。

「どれもこれも、至高なるアインズ様にふさわしい玉座ね」

ふさわしい存在に腰掛けられるのを黙して待つ玉座たち。そのどれもが希少金属や希少素材によって作られていた。黄金やミスリルなどといったチャチな金属は存在しない。最低でもアダマンタイトや上位ドラゴンの骨で構成されている。しかしそれらは本当に最低限であり、あくまでもスペアや道楽の意味合いが強い。事実それら区画の中でも隅のほうに追いやられていた。(これらのスペア玉座一つで、数多の国々の王を虜にするだろう。最低でも歴史ある国の、最も重要な宝に指定されるだろう)では「ふさわしい」玉座はどのようなアイテムで構成されているのか。それはこの世界の人間の神話にも

出てこない夢の素材。ヒヒイロカネ、アポイタカラや隕鉄。超上位モンスター^①の骨や胆石だった。

その中に一つ骨のみで構成された玉座があった。人間種の骨で構成されている。素材だけで見れば、この辺りの玉座のどれにも劣るが、それを感じさせない輝きがあった。丹念に磨かれた骨は宝石のようであり、見るものにまったくおぞましさを感じさせない。さらにつとして同じもののない骨が、まるで元からあったかのように組上げられている。並大抵の技術ではない。並外れた大工としての技術と、骨を知り尽くす技術、そして主人への敬愛。それらすべてが合わさって、この玉座は完成したのだろう。ソリュシヤンは少し興味が出て、アサシンの観察眼を持ってその玉座を注視する。

「亜人の骨が68%、人間の骨が30%、残りの2%は……上位悪魔？」

亜人や人間なら分かる。しかし上位悪魔の骨となると難しい。この玉座は作成日が直近の棚に置かれている。であるならば、おそらくナザリックが転移に巻き込まれたあとだろう。この世界で上位悪魔の骨など現地調達できるわけがない。もしそういった存在に出会ったならば、さすがにソリュシヤンの元にも情報が来るだろう。

「となると、手持ちから持ち出した……いえ、まさか」

ソリュシヤンは聡いスライムだった。散らばった情報から一つの結論を導き出すのは彼女の得意分野とも言える。

「手持ちの上位悪魔の骨、いえ、自分の骨で作成されたのね……」

ナザリックにおいて、手先が器用そうで知識豊富な上位悪魔などお一人しか思い浮かばない。ソリュシヤンはその玉座からそつと目を逸らし、次の玉座を見繕っていくのだった。

第5話

そうして、ソリュシヤンは玉座をいくつも吟味していった。どれもこれも素晴らしい物ばかりだったが、彼女の琴線には、不敬かもしれないが、触れなかった。彼女は敬愛する主人に「少しでも寛いで欲しい、休まれて欲しい」と考えていたからだ。

「(アインズ様はきつとお疲れになるなんてことはないでしょう。しかし彼の御方こそ、このナザリックにおいて最も働かれているという現状には変わらないわ。私たちが無能であるゆえに)」

ソリュシヤンはぐつと体に力を込める。そうしなければ、情けなさで体を崩壊させ自害してしまうかもしれないからだ。

「とにかく、アインズ様にふさわしい、そしてお寛ぎになれる玉座を見つけましょう」

彼女はそう言つて、うーんうーんと唸りながら棚を物色していくのだった。

それからしばらく経った頃、ソリュシヤンは「あつ」と声を上げた。そして「これだわ……」と感慨深くつぶやいた。

ソリュシヤンはその玉座を眺める。素材は申し分ない。装飾も華美ではなく、しかし、威厳がある。なによりアイテム名が気に入った。「コンフォートチェア(極楽椅子)。まさしく今のアインズ様に必要な玉座ね!」

極楽、というのが何なのかはよく分からないが、「楽の極み」ということなのだから、座るとおそらく癒しの効果が働くのだろう。ソリュシヤンはそれをうきうきしながら、丁寧に運び出すのだった。

宝物殿からコンフォートチェアを運び出すと、ソリュシヤンはアインズにメッセージで連絡を取った。

「アインズ様。お時間宜しいでしょうか」

「おお、ソリュシヤンか。少し待て」

「大変申し訳ございません。ご政務中とは知らず、アインズ様の貴重なお時間を……、後ほど再度ご連絡いたします」

「いや、謝ることはないぞ。クリエイト・アンデットの選定をしていた

「ただだからな」

ソリュシヤンは感激で声が震えそうになった。

「ナザリツクの防衛力を高める上で、アンデットを創造するということは最重要事項とも同義。それを『だけ』だなんて……」

そんな重要なことよりも自分を優先してくれるアインズにソリュシヤンはいつそうの忠誠を誓うのだった。

「お気遣い感謝いたしますアインズ様」

「……ああ」

「それでは報告させて頂きます。先ほど破損した玉座の、代わりを選定し持つてまいりました」

「ほう、そうか。それはご苦労だったな」

「もったいなきお言葉でございます。それでは配置したく思いますので、玉座への入室の申請を行い、アルベド様にご許可をとって参ります」

「(え、玉座ってそんな申請要るの?)」

アインズは少し戸惑い、NPCやシモベに申し訳なく思った。

「(彼らにとつてここはやっぱり特別な場所なのかな。そりやうれしいけども、そういう手続きの煩雑さとかはなくしていきたいんだよね。そういうところと時間を割くより、やってほしいことは……まあ今はそんなないけどこれからたくさん生まれるだろうし。なにより、我らがナザリツクはホワイト企業を目指しているわけだし、極力社員たちへの負担は軽減したいよね)」

そういうことの積み重ねが、カリスマ溢れる指導者になるための一歩になるんだ、とアインズが一人決意していると「アインズ様？」とソリュシヤンが不安そうに声をかけてきた。

「んん！ いいか、ソリュシヤン・イプシロンよ」

「はっ」

「その……だな。そう、その手続きは必要ない」

「なっ……。左様ですか。失礼致しました」

「うむ。そのまま持つてくるがいい」

「かしこまりました。重ね重ね申し訳ありませんが、アルベド様にも

お伝えしなくて宜しいのでしょうか」

「…うむ。(俺の独断だし、アルベドが知ったらおこりそうだな!)」

「…かしこまりました」

「(なんか納得してない雰囲気だなあ)」

しかしアインズはこういうときに彼らを納得させる魔法の(ゴリ押し)言葉を、度重なる支配者ロールで会得していた。

「……ソリユシャン」

「はっ」

「私はお前を信頼している。お前の忠義はこの私が一番良く知っている。だから手続きなど必要ない」

「も、もったいなきお言葉……!」

メツセージの向こうでべちゃりと音がしたような気がしたが、気のせいだろう。

「ふふ、構わん。玉座の間の衛兵には私から言っておこう。そのまま入って設置してくるといい」

「はっ」

「ではな。お前の選んだ玉座、楽しみにしているぞ」

アインズがそう言い、メツセージを切った。直前にべちゃべちゃっ!と何かが崩れるような音がしたが気のせいだろう。アインズは再び政務(暇つぶしのアンデット選定)に戻るのだった。

この時、アインズとソリユシャンは一つずつミスをした。アインズのミスは手続きを省いたこと。ソリユシャンのミスはアインズに省略の理由を問わなかったこと。これがナザリック全土を震撼させ、全てのシモベを恐怖と失意のどん底に突き落とすことを、このとき二人はまだ知らない。

そう、このコンフォートチェア(極楽椅子)の製作には至高の41人の中で最も問題児とされた、るし☆ふぁーが関与していたのだった。